

## 銭湯ペンキ絵師

## つれづれ日記

## 第13回

田中みずき(銭湯ペンキ絵師)

## 銭湯観

様々な年齢のかたと銭湯について話していると、世代によって銭湯観が大きく違うことがわかります。

「若い頃は家に風呂が無くて銭湯に通っていたね」と懐かしそうに語る高齢の方、「子供の頃に行っていたけれど、しばらく行っていなかった。」という40代の方のほか、20代の若者は「レトロで面白い」と新鮮に捉えなおし、SNSなどに自分の銭湯体験を載せています。

人々の銭湯観を変えたターニングポイントは個人的に70年代～80年代にあるのではないかと考えています。この時期に何歳であったか、そしてどのように銭湯に関わってきたかが重要です。若い世代には、まだ生まれていない遠い過去のことでしょう。この頃、小説や評論、漫画の中でも、銭湯の捉えかたが変わってくるのです。

## 時代は銭湯をいかに捉えるか

例えば藤子不二雄<sup>①</sup>による漫画『まんが道』。主人公が漫画家として成功する姿を追う物語で、1970年～72年、77年～82年に漫画週刊誌で連載され、まとまったものが数社から刊行されています。物語は主人公が小学5年生の昭和20年から始まります。本作の中で、青年期に雑誌連載を呼びかけられた主人公が銭湯へ行き、ペンキ絵が描き替えられていることに気づくシーンがあります。描き替えに気づくということは、足繁く通っているということでしょう。しかし、この話の大部分が著者の体験を元に描かれ、若かりし頃を回顧した結果として銭湯の場面が書かれたという点に留意しなければなりません。

また、本紙3月号でも紹介した石子順造の『キッチン論』(喇嘛舎、1986年)に収められた「キッチン論ノート」(1971年、同書収録)では、現代に対比する「近代」を象徴するものとしてペンキ絵を捉えています。同書に収録された「銭湯のペンキ絵」(1970年)では、時代を追って銭湯に集う人々が〈ムラ〉から〈群化〉し、「都市人口の急増と住宅事情の悪化は、銭湯を便宜以上の何物でもなくしてしまったと思える。数もふえ、設備はいつそう近代化されながら、銭湯は、誰のものでもありうる便宜



によって、誰のものでもなくなっていく。(中略)私人として分断され、疑似的な〈自由〉を享受するアパートの一室で、風呂つきのマイホームを夢想するための、とりあえず便宜の場でしかない。」と続けます。

この文章が書かれる数年前の1968年には都内に2,687軒の銭湯があり、全盛期と言える状況でした。石子の言葉は、その後の銭湯離れを予見する指摘だったと言えるでしょう。

## 銭湯は時代をいかに捉えるか

この流れは、1970年代後半の赤瀬川原平の雑誌連載「妄想科学小説」(『公評』、公評社)からも窺えます。「次郎はやっとのことで風呂場を手に入れた。いままではずっと銭湯だったのだ。(中略)それにやはり現代では、自分の風呂場をもっていないと一人前でないような気がしたりして……。」(「マイホーム計画」、1976年8月)、「いうまでもないことであるが、近年の家庭用ホームバスの普及によって、いまや大衆浴場は絶滅の危機に瀕している。」(「てんやもの」1977年3月)など、この時期にマイホームを持ち銭湯から離れていく人々の姿が捉えられているのです。

マイホームの普及とともに、銭湯を前近代的な場として捉えるようになって50年弱。時代がどのように変化し、銭湯という場に何が求められているのか、再考が求め続けられています。常連客を大切にするのは勿論、現代の若者には続く不況によって銭湯が少し贅沢な場所と捉えられている可能性もあります。顧客層や、どういった場として銭湯を提示していくべきか、何を残し、何を变えるべきかなど、一軒一軒の銭湯のブランディングが問われているのです。

プロフィール ● 1983年大阪生まれ。幼少時から東京在住。筑波大学付属高等学校進学後、明治学院大学在学中に銭湯ペンキ絵師・中島盛夫氏に弟子入り。現在は独立し、銭湯のペンキ絵のほか、老人ホームの浴室や店舗など制作の場を広げている。現代美術展覧会・レビュー情報サイト「カロンズネット」元編集長。ペンキ絵制作に関する活動は、ブログ「銭湯ペンキ絵師見習い日記」(<http://mizu111.blog40.fc2.com/>)にて随時掲載。